校長室だより～燦燦～ №４２６

先生か私か

2021.9.16

教員をやっていると、ある問題に直面することがある。子どもたちの前で、自分のことを何と呼ぶかである。

小学校の先生は、自分のことをごく自然に「先生」と称していることが多い。「先生は、みなさんのことを～」といったぐあいである。小学校の校長となった私は、さてどうしようかと思案に暮れた。自分のことを「校長先生は」ということに抵抗があったのである。通常であれば、「私は」であろう。だが、大事なのは、受け手である子どもたちである。結局、無難に「校長先生は」とした。だが、毎回、そう話すたびに違和感を覚えていた。

高校の先生は、どうであろうか。「私は」という方が多い。中には「俺は」という方もいる。「先生は」という方は少ないように思う。高校の校長となった私は、今度は迷わなかった。「先生は」とは言わなかった。だが、「わたしは」なのか「わたくしは」なのか、考えることはあった。改まった入学式や卒業式では、「わたくしは」を使っていたように思う。

では、中学校はどうであろうか。教員が自分をどう呼ぶか。一番迷うのが中学校である。中学校の先生方に、どう自称しているか聞いてみると、「先生」派と「私・僕」派とに分かれるように思う。

先生と自称する教員が高校には少なく、小学校がその逆なのはなぜなのか。高校では、生徒をある部分で大人とみなし、互いの人間性を尊重した付き合いが前提とされる。そういう場で、教員が「先生」と自称するのは、子どもたちを子ども扱いする印象を与えてしまう。これに対して小学校では、教員は保護者的な存在として認知される。実際、子どもたちから「お母さん」と呼び間違えられる女性教員は少なくない。

高校のような対等の関係を築くにはまだ間がある中学校で、しかも保護者的な関与に反発する子どもたちを前にして有効な自称名詞とは何なのか。中学校生活のある時期、教員が「先生」から「私」に自称名詞を変えるのはどうであろう。それもいつの間にかではなく、「先生」と呼ぶ世界に別れを告げるための通過儀礼を設けるのである。

「今日から皆さんは２年生です。私は、これから皆さんの前で、自分のことを『先生』ではなく『私』と呼ぶことにします」どうして呼び方を変えるのか問われたら、こう答える。「これまで多くの部分を保護者として守ってきましたが、今日からは一緒に同じ方向を向いて学ぶ主体として皆さんを尊重し、自分の行動や言葉に責任の取れる人間として接するつもりだからです。皆さんを今までよりも大人として見るということです。大人として接するということです」

「先生」か「私」か。小学校と中学校、そして高校と勤務した私だからこその悩みなのかもしれない。いざ子どもたちの前で話そうとすると、意外と迷うのである。相手をどう見るかということに関わるため、そう簡単には考えることはできない。現在の相手は、中学生の皆さんである。今でも、時折考えることがある。「先生」にするか「私」にするか。